

研究ノート

新出写本『四十二の物あらそひ』の紹介と翻刻

同志社女子大学 表象文化学部・日本語日本文学科 教授 吉 海 直 人

【解題】

一、新出写本

従来のものと異なる書き出しになっている『四十二の物あらそひ』の写本を入手した。たまたま『小町業平歌問答』の解題^①で、『四十二の物あらそひ』とのかかわりを論じたばかりだったので、その余韻が引きあわせてくれたのかもしれない。

入手した写本を開き、その冒頭を見て驚いてしまった。そこに「何れの御時とかや」と記されていたからである。これは間違いなく『源氏物語』桐壺巻を踏まえたパロディであろう。一般に知られている『四十二の物あらそひ』は、「昔、奈良の帝の御時」云々と始まっているはずである。現在まで「いづれの」で始まっている『四十二のものあらそひ』は報告されていないようなので、それだけでも本書を紹介する価値はありそうだ（私が知らないだけかもしれないが）。そこで『四十二の物あらそひ』の新出写本として、その本文の翻刻を掲載する次第である。

もともと『四十二の物あらそひ』には、歌題の設定を含めて『源氏物語』からの引用も多いのであるから、本書はその究極の姿と見ることもできよう。内容を一覧すると、本書にはかなりの独自異文や和歌の順序の違いが存していることがわかった。従来知られてい

る伝本と一致する本文は見当たらないようである。

もともと『四十二の物あらそひ』の写本自体、かなり自由に書写されているようなので、必ずしも特筆すべき珍しい伝本とは言えないかもしれない。まして本書の書写年代はかなり下る（近世後期以降か）ように見えるので、決して古態を留めているわけではなく、むしろ流布の間に拡散したとも言える。

二、本書の特徴

ただし本書の本文の方が古態をとどめている、あるいは整合性があると思われる部分もいささか認められそうである。例えば『四十二の物あらそひ』が行われるに際して、赤木文庫本などでは、

中の宮の御かたをはじめとして、いま四十一^②なれば、（『室町時代物語大成6』431頁）

となつてゐる。この場合、「今四十一首ある」というのではなく、「あと四十一首必要」という意味であろう。それに対して本書では、

中宮ノ御方よりはじめ、いまひとつなれば、

となつてゐる。これは「四十」が欠落したのではなく、数え方を反対にしているのであろう。これだと「今はまだ中宮の歌一つだけなので」という意味になる。

残念なことに、本書には和歌が四十首しか掲載されていない（そ

ういう伝本も多いらしい)。つまり全体としては二首足りないわけだが、そのうちの一首は「神のあらそひ」のところである。本来ならば「伊勢と賀茂と」と「八幡と熊野と」の二首が存するところであるが、本書ではそれが、

伊勢とかもと

いわし水清きながれをわすねど身にしむものはかもの水くき
(二五)

となっている。要するに「伊勢と賀茂と」題の歌と「八幡と熊野と」という題までが、目移りなどで抜けているのである。それだけの単純な欠落ではなく、そのことに整合性をつけるためか、歌の五句目だけが「賀茂」の歌になっている。これでは「八幡と賀茂と」題にせざるをえない。この複雑さは、本書の書写以前の親本の時点で、既にそうになっていたと考えられる。

また末尾に、

十五首め 内大臣

あか月のわかれの袖の露よりもとわぬうらみにやるかたもなきと記されている。「十五首め」とあるが、正しくは十六首めとなる。これは最初の歌を勘定に入れず、二首目から数えたものかもしれない。本文では歌の上の句に訂正が施されており、そのために判読しにくくなったので、あらためて末尾に正しい本文を抜き出したのであろう。

三、書誌など

『四十二の物あらそひ』³⁾所収の和歌は創作を原則とするようだが、既に指摘されているように、本書三十二首目の、

逢てあわぬ恋ひたすらあわぬ恋

あひみての後の心にくらぶればむかしはものをおもはざりけんは、『拾遺集』所収の敦忠歌である。この歌は百人一首にも所収されている有名なもので、多少の教養があればすぐに古歌とわかるはず

である。

最後に本書の書誌を簡単に述べておこう。影月堂文庫蔵写本。書名は扉の中央に「四十二ものあらそひ」とあり、端作りには「四十二の物あらそひ」とある(本文と同筆)。装丁は袋綴。ただし改装されている。表紙の色は青系統で、亀甲繫ぎ紋の空押しがある。外題なし。寸法はタテ20cm×ヨコ12.8cm。料紙は楮紙。丁数は全十七丁半(遊紙なし)。本文は七行書きを基本としている。一丁目は扉題で裏は余白になっており、本文は二丁目から始まっている。なお末尾の半丁は、裏表紙の見返しとして貼り付けられている。書写年代は近世後期以降であろう。

なお、本書では和歌の詠者が記されていないものがある。詠者名表記も諸本によって異なっているようなので、記されていない部分には(?)を施しておいた。また四十首の和歌には通し番号を付けておいた。

【翻刻】

四十二ものあらそひ(一才)

四十二の物あらそひ

何れの御時とかや、東宮ノ御方へならせおはしまし、きさらぎ(傍注「二月也」)なかばの比成に、南天の桜は夕ばへにあかぬ色をそへ、みぎわの柳は(2才)もへぎの糸を、かれたるかとうたがはれ、萬にながめおはします。東宮仰しは、春と秋と何れおとらぬ色なれども、なをもの、あわれをもよほし、ことにふれてかなしきは秋の夕部にこそ侍れ。(2ウ)もろこしには春をあわれと見、我てうには秋をあわれとこそ見へけん、いかに定めおぼしめさる、にやとお、せけ

れば、中宮ノ御方よりみどりのうすやうに、

大かたはあらそふ比としりながら心ひとつに秋は定めん（一）
（三才）

とあそびしければ、侍従して奉る。女は秋をあわれむことわりとて
わらはせおはします。上もいつよりかはつれ／＼に思召さるゝなれ
ば、是を初而四十二のものあらそひ有べしとて、ないしのすけなど
は文立おの／＼まいり給ふ。中宮ノ御方より」（三ウ）はじめ、いま
ひとつなれば公卿天上人かほ打あかめてさぶらひ給ふ。
先上より、

雪のあしたと月の夜と

ふる雪はつもらぬよりも有明の月ぞくまなき冬の山里（二）

東宮より

東山と西山と」（四才）

月影の出つる方もわすられて入かたに住わがこゝろかな（三）

（？）

時雨と松風と

わきてなをあわれ成しをまつ風のしぐれの音もかよざりせば

（四）

ふしみの宮

衣うつ音夜舟こぐ音

衣打やどには君もかよひけりねられぬものわ」（四ウ）よぶねこ

ぐおと（五）

中務の宮

病に薬かいたると恋敷人に逢と

嬉しさは何れもおなじ色なれどこいしきかたに引心かな（六）

かうき殿女御

風に波よする柳と露にみだるゝすゝきと」（五才）

青柳の影ふむ道にやすらわんまねくすゝきとさもあらばあれ

（七）

東侍従

おぎとはぎと

むらはぎの露もあだ成ながめより身にしむ物はおぎの上風（八）

東中将

手と歌と」（五ウ）

はま千鳥それさへみえぬ跡ぞうき和歌の浦にはまよひはつとも

（九）

くわう大ごう宮の大夫

かいおゝゝると手まりと

黒髪のみだれかゝれるまりよりもかゝるにかゝれる袖ぞなつかし

（一〇）

大納言の君」（六才）

手とことばのたらひたると

しき鳴や大和言葉の有ぬれどみるかいもなし水くきの跡（一一）

（？）

あいとすがたと

よそにみる花のすがたを忍びても逢みぬ恋ぞしづ心なき（一二）

（？）

鶯と時鳥と」（六ウ）

鶯のさへづる春のあしたよりなを珍しきほとゝぎすかな（一三）

ときわの大将

しゃうよう臣がうらみとわう照君がかなしみと

なげき行道の草葉の露よりもまど打雨や袖ぬらすらん（一四）

（七才）

関白大臣

うとまるゝとあかぬわかれと

わかる身はうきになぐさむことも有あかぬわかれの跡ぞかなし

き（一五）

内大臣

帰るあしたのわかれとたのみてとわぬ夕部と

明月のわかれの袖の露よりもとわぬ」(7ウ) うらみぞやるかたもなき(一六)

中宮さへもんのかみ

ばいたんのおきなとつりするあまと

塩がまのけぶりになる、袖よりもつりするあまの袖ぬらすらん

(二七)

大将の君

ゆめとふみと」(8オ)

はかなしやまれにあひみる玉づさと見し夜のゆめを何にたとへん(一八)

近衛ノ大将

おもへどもあわぬとうらみ有と

ながらへばせめて逢ふ夜も有ぬべしおもわぬ人を待ぞかなしき

(二九)

花山院侍従年十一歳」(8ウ)

軒のしのぶと岩ねの松と

さみしきは岩ねの松や増るらん軒のしのぶはあまりめなれて

(二〇)

五条大納言

紅葉とおち葉と

紅葉ばをさそふ嵐をつらからじ庭のにしきにもものぞかなしき

(二二)」(9オ)

九条さい将

みめとしほと

しほやかぬ浦ぞさびしき唐崎のまつのがたをなに、かはせん

(二二)

(?)

花と紅葉と

もみぢばのちり行秋の夕部より花ぞものうき風をうらみむ

(二三)」(9ウ)

内侍のすけ

菊と梅と

白菊のうつろふ色をみるもうし軒ばの梅のかほりしのばむ

(二四)

かやうにあらそひおはしける折ふし、源氏院の大将女院へ参給ひて

此よしをけいし給ひければ、取あへず女院」(10オ)ならせ給ひければ、御門おもひよらぬ只今の御幸、何事にやとおどろかせおはします。

つれ／＼に侍りける折ふしか、る御遊びと承り参侍りとあり。いまだ神のあらそひ侍らずやとて、

女院の御方より

伊勢とかもと」(10ウ)

いわし水清きながれをわすれねど身にしむものはかもの水くき

(二五)

さい相の中将

みめわろきとありかの有と

かつら木の神はよるともちぎりけんしらずありかをす、むなら

ひは(二六)

四位の少将」(11オ)

みねさけぶさるとつまこふしかと

うきことをましら声に聞そへてつまこふしかの音こそつらけ

れ(二七)

左衛門ノ守

遠里のけふりと峯にわかる、よこ雲と

遠さとに一筋たてる夕けふりみね行雲にまがふものかわ(二八)

五条宰相」(11ウ)

しうとめとま、母と

むさし野、ゆかりの花もつられどなをものうきはおやならぬ

おや（二九）
内し権守

女郎花となでしこと

女郎花しおるゝ野辺にまじるともなをうとまれぬやまとなでし

こ（三〇）

ほり川の大將」（12オ）

雲井の雁とみぎはのおしと

はかなしやみぎわのおしのうき枕くも井の雁に及べきかわ

（三一）

あふ坂の大納言

逢てあわぬ恋ひたすらあわぬ恋

あひみての後ノ心にくらぶればむかしはものをおもはざりけん

（三二）（12ウ）

上ノ御めのと

ふじと山ぶきと

いけ水にそこまでにほふふじの花たぐえても見じ出の山吹

（三三）

中宮ノ大納言

卯ノ花とつばきと

玉つばき千代とふりたる色なれどよを卯の花をなに、かわせん

（三四）（13オ）

女一ノ宮御ものゝけにわづらはせ給ふにせう心寺のそう正はかぢに

参り給ふを召て、

（僧正）

せんほうとらいさんと

なむしじんよりすぐりたる数よりもおほどかなれやていしてい

さん（三五）

女三ノ宮御乳人

かしわぎのゑもん源氏ノ女三ノ宮しとねの下に見付られし

とうき舟ノ君」（13ウ）かほる大將にしられ奉りて末の松山
と書付けて遣されしこと、はしも何れかつらからむ

うき舟の身をこがしたるおもひよりしとねの下にしくものぞな
き（三六）

大納言の局

おほろ月夜のないしのかみかうき殿のほそどのにあい染し」

（14オ）源氏の君おち葉の宮に夕ざりの大將小野にて見初し

といづれかわりなからん

おきそめしおち葉がうへの露よりもおほろ月の影ぞ恋しき

（三七）

近衛大將

かしは木のゑもんむなしく成ての思ひと有明の大將山ふか

きかなしさと何れか」（14ウ）

おもひ出し月は今夜をたのむともきへしけぶりの行すゑはなし

（三八）

其後上より、みめよくしなたかき上ろふのゑもぎむぐらにとぢられ

てなぐさむ物としては歌をよみくわんげんをして暮シたらんと、又年

よりくちたるおきなのとみたるがおきなが」（15オ）ものわごぜんの

物とてわな、きふるひたらんといづれかなるべき。女房の御身へと

て御すゝり被下たるに、

（女房）

あじきなきとみの小川の流れよりこけむすやどに月をながめん

（三九）

又

あじきなきとみの小川にすみなれてこけむすやどをよそにこそ

みめ（四〇）

是にて四十式侍り。色々に定め給ふ」（15ウ）中にもときわの大將ノ

御うたにぞ先てんはかゝりけれ。次々十一種はかけさせおはしまさ

す。其後はさかづき参。十六日夜月や、すみのぼるに色々のかづき引出物給りて、なをしかりぎぬすがたにてとりくの中に中宮た、ならぬ御事にて只今御さとへ」(16オ) 出させたまふべきを、御門あかずかなしとおぼしてと、めおはします。今廿一にならせおはします。白キ御小袖になよびかに柳の五ばかりをおかしう召なして、さうの御琴により居させたまふ。御せうとの兵部卿おりもの、御なをしけさうはなやかにて、よこぶえ」(16ウ) ふきたまふ御さま、くまなき月にさし向てうつくしさおろかならん。中宮の御かほよくかよひ給へり。ことわりと御かど御覧する。御かどは御びわ、院の御かた和ごん、りつのしらべいとおもしろきこゆる。右の大臣どの浅くらうたいそうし給ふ。花山ノ院の」(17オ) 侍従の君、いまだわらわにてすがたおかしげにてひちりきふき給ふ。女院の御方より紅の御きぬかづき給ふ。かりそめの御あそびとおもへども殊更身にしむばかり也。やうく明方になりて御かどくわんぎよならせおはします。ときわの大将は」(17ウ) ないしのすけが名こりわすがたのくみおぼしめす。

十五首め 内大臣

あか月のわかれの袖の露よりもとわぬうらみにやるかたもなき」(18オ)

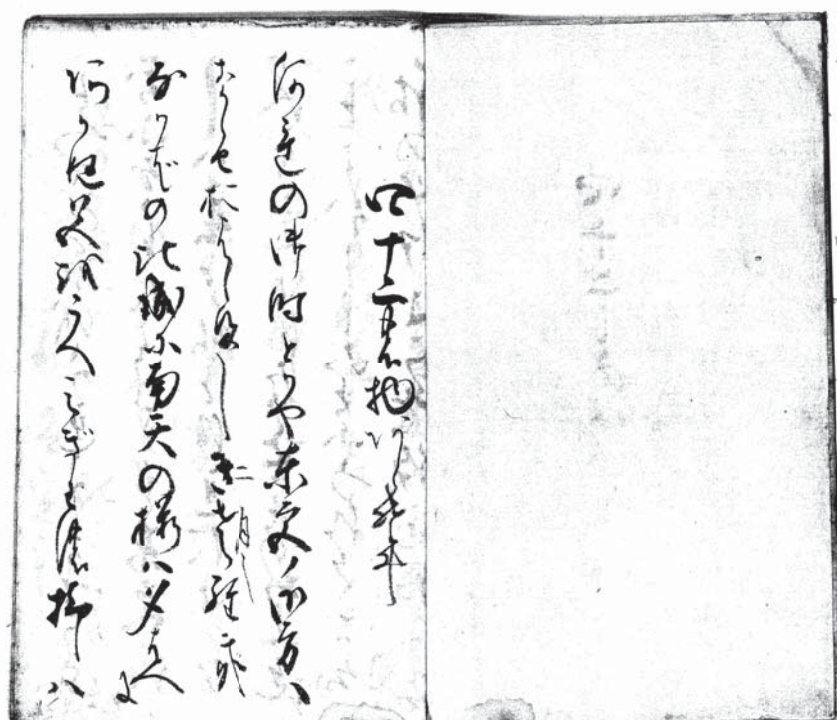
〔注〕

- (1) 吉海直人『小町業平歌問答』続考―新出『歌品問答』の紹介―同志社女子大学大学院文学研究科紀要11・平成23年3月。両作品は最初の題からして「春秋優劣」で共通している点、相互の交流も考えられる。
- (2) 『四十二の物あらしひ』の翻刻としては、以下のものがあげられる。最近は豪華な絵入絵巻が発見・報告されている。

- 1 「四十二の物あらしひ」『続群書類従三十三上』(群書類従完成会) 昭和33年11月

- 2 横山重・松本隆信氏編「四十二の物あらしひ(仮題) 赤木文庫本」『四十二の物あらしひ 東洋文庫蔵古活字本』『室町時代物語大成第六』(角川書店) 昭和53年3月
- 3 「春秋優劣物語」早稲田大学蔵資料影印叢書8『早稲田大学出版部』昭和62年3月
- 4 「四十二の物あらしひ」『奈良絵本絵巻集12』(早稲田大学出版部) 昭和63年10月
- 5 石川透氏「四十二の物あらしひ」二本解題・翻刻」三田国文29・平成11年3月
- 6 金光桂子「翻刻『四十二の物あらしひ』」『京都大学蔵むろまちものがたり11』(臨川書店) 平成13年12月
- 7 齋木泰孝・加藤千恵子氏「翻刻四十二の物あらしひ」国語国文論集32・平成14年1月
- 8 迫村知子・石川透氏「慶應義塾図書館蔵卷子本『四十二の物あらしひ』解題・翻刻」古典資料研究8・平成15年12月
- 9 石川透氏「慶應義塾図書館蔵『四十二の物語』翻刻」三田国文38・平成15年12月
- 10 齊藤歩氏「翻刻」白百合女子大学図書館蔵『四十二物あらしひ』国文白百合36・平成17年3月
- 11 石川透氏「四十二の物あらしひ(縦型断簡) 解題・影印」三田国文44・平成18年12月
- 12 石川透氏「複」四十二の物あらしひ」『室町物語影印叢刊32』(三弥井書店) 平成20年6月
- (3) 真下美弥子氏「御伽草子『四十二の物あらしひ』考」国語と国文学62―9・昭和60年9月、永野聡子氏「御伽草子『四十二の物あらしひ』の伝本系統の考察」国語と教育15・平成2年11月参照。なお周防朋子氏「御伽草子『四十二の物あらしひ』」立教大学図書館蔵「扇の草紙屏風」との関わり」奈良絵本・絵巻研究8・平成22年9月では「扇の草子」との歌の重複が指摘されているが、むしろ「小町業平歌問答」と一致しているようである。

〔図版1〕新出写本の冒頭（2オ）



〔図版2〕新出写本の末尾（18オ）

